スーパーソリスト達による
秋の特別コンサート

－2022－

主催：ジャパン・アーツ

スーパーソリスト達による
秋の特別コンサート Vol.1

室内楽の夕べ　Chamber Music Evening

11月28日(月) 19:00　東京　サントリーホール
November 28 Mon. 19:00 Tokyo Suntory Hall

学生サポートパートナー：
ソーシャルキャピタルマネジメント
LOGIC & EMOTION
love courage passion

モーツァルト：ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 K.478
W. A. Mozart: Piano Quartet No.1 in G minor, K.478

第1楽章：アレグロ	1st Mov.: Allegro
第2楽章：アンダンテ	2nd Mov.: Andante
第3楽章：アレグロ・モデラート	3rd Mov.: Allegro moderato

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲第1番 ニ短調 Op.49
F. Mendelssohn: Piano Trio No.1 in D minor, Op.49

第1楽章：モルト・アレグロ・アジタート	1st Mov.: Molto allegro agitato
第2楽章：アンダンテ・コン・モート・トランクィロ	2nd Mov.: Andante con moto tranquillo
第3楽章：スケルツォ、レッジェーロ・エ・ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Scherzo. Leggiero e vivace
第4楽章：フィナーレ、アレグロ・アッサイ・アパッシオナート	4th Mov.: Finale. Allegro assai appassionato

ブラームス：ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 Op.25
J. Brahms: Piano Quartet No.1 in G minor, Op.25

第1楽章：アレグロ	1st Mov.: Allegro
第2楽章：インテルメッゾ、アレグロ・マ・ノン・トロッポ	2nd Mov.: Intermezzo. Allegro ma non troppo
第3楽章：アンダンテ・コン・モート	3rd Mov.: Andante con moto
第4楽章：ジプシー風ロンド、プレスト	4th Mov.: Rondo alla Zingarese. Presto

樫本大進（ヴァイオリン） Daishin Kashimoto, Violin
赤坂智子（ヴィオラ） Tomoko Akasaka, Viola
ユリアン・シュテッケル（チェロ） Julian Steckel, Cello
藤田真央（ピアノ） Mao Fujita, Piano

スーパーソリスト達による
秋の特別コンサート Vol.2

藤田真央 協奏曲の夕べ　Mao Fujita Concerto Evening

11月30日(水) 19:00　東京　サントリーホール
November 30 Wed. 19:00 Tokyo Suntory Hall

ウェーバー：歌劇「オイリアンテ」序曲
C. M. v. Weber: "Euryanthe" Overture

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 Op.18
S. Rachmaninov: Piano Concerto No.2 in C minor, Op.18

第1楽章：モデラート	1st Mov.: Moderato
第2楽章：アダージョ・ソステヌート	2nd Mov.: Adagio sostenuto
第3楽章：アレグロ・スケルツァンド	3rd Mov.: Allegro scherzando

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30
S. Rachmaninov: Piano Concerto No.3 in D minor, Op.30

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント	1st Mov.: Allegro ma non tanto
第2楽章：インテルメッゾ、アダージョ	2nd Mov.: Intermezzo. Adagio
第3楽章：フィナーレ、アッラ・ブレーヴェ	3rd Mov.: Finale. Alla breve

藤田真央（ピアノ） Mao Fujita, Piano
ロリー・マクドナルド（指揮） Rory Macdonald, Conductor
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 Tokyo City Philharmonic Orchestra

スーパーソリスト達による
秋の特別コンサート Vol.3

スペシャル・ガラ・コンサート　Special Gala Concert

12月3日(土) 13:30　東京　サントリーホール
December 3 Sat. 13:30 Tokyo Suntory Hall

＜第1部　至高のアンサンブル＞

R.シュトラウス：歌劇「カプリッチョ」より前奏曲
R. Strauss: Prelude from "Capriccio"

チャイコフスキー：フィレンツェの思い出 Op.70
P. I. Tchaikovsky: Souvenir de Florence, Op.70

第1楽章：アレグロ・コン・スピーリト	1st Mov.: Allegro con spirito
第2楽章：アダージョ・カンタービレ・エ・コン・モート	2nd Mov.: Adagio cantabile e con moto
第3楽章：アレグレット・モデラート	3rd Mov.: Allegretto moderato
第4楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	4th Mov.: Allegro vivace

樫本大進／日下紗矢子（ヴァイオリン） Daishin Kashimoto / Sayako Kusaka, Violin
赤坂智子／鈴木学（ヴィオラ） Tomoko Akasaka / Manabu Suzuki, Viola
ユリアン・シュテッケル／遠藤真理（チェロ） Julian Steckel / Mari Endo, Cello

＜第2部　珠玉のオペラ・アリア＞

ロッシーニ：歌劇「セビリアの理髪師」より「私は街の何でも屋」（大西宇宙）
G. Rossini: "Largo al factotum" from "Il Barbiere di Siviglia"

ベッリーニ：歌劇「ノルマ」より「清らかな女神」（森谷真理）
V. Bellini: "Casta Diva" from "Norma"

ヴェルディ：歌劇「トロヴァトーレ」より「君のほほえみ」（大西宇宙）
G. Verdi: "Il balen del suo sorriso" from "Il Trovatore"

ヴェルディ：歌劇「トロヴァトーレ」より「聞いたかな、朝ともなれば」（森谷＆大西）
G. Verdi: "Udiste? Come albeggi" from "Il Trovatore"

ヴェルディ：歌劇「運命の力」より「神よ平和を与えたまえ」（森谷真理）
G. Verdi: "Pace,pace,mio Dio!" from "La Forza del Destino"

森谷真理（ソプラノ） Mari Moriya, Soprano
大西宇宙（バリトン） Takaoki Onishi, Baritone
ロリー・マクドナルド（指揮） Rory Macdonald, Conductor
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 Tokyo City Philharmonic Orchestra

＜第3部 グランド・フィナーレ＞

ショパン：アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22
F. Chopin: Andante Spianato and Grande Polonaise in E-flat major, Op.22

ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43
S. Rachmaninov: Rhapsody on a Theme of Paganini, Op.43

ブルース・リウ（ピアノ） Bruce Liu, Piano
ロリー・マクドナルド（指揮） Rory Macdonald, Conductor
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 Tokyo City Philharmonic Orchestra

MEDIHEAL & SEKIDO present

スーパーソリスト達による
秋の特別コンサート Vol.4

イム・ユンチャン ピアノ・リサイタル Yunchan Lim Piano Recital

12月3日(土) 19:00 東京 サントリーホール
December 3 Sat. 19:00 Tokyo Suntory Hall

特別協賛:MEDIHEAL & SEKIDO
後援:駐日韓国大使館 韓国文化院

ギボンズ:ソールズベリー卿のパヴァーヌとガイヤルド
O. Gibbons: "Lord Salisbury" Pavan and Galliard

J.S.バッハ:シンフォニア BWV787-801(全15曲)
J. S. Bach: 15 Three-Part Inventions, "Sinfonias", for Keyboard, BWV787-801

第1番 ハ長調 BWV787 No.1 in C major	第2番 ハ短調 BWV788 No.2 in C minor	第5番 変ホ長調 BWV791 No.5 in E-flat major
第14番 変ロ長調 BWV800 No.14 in B-flat major	第11番 ト短調 BWV797 No.11 in G minor	第10番 ト長調 BWV796 No.10 in G major
第15番 ロ短調 BWV801 No.15 in B minor	第7番 ホ短調 BWV793 No.7 in E minor	第6番 ホ長調 BWV792 No.6 in E major
第12番 イ長調 BWV798 No.12 in A major	第13番 イ短調 BWV799 No.13 in A minor	第3番 ニ長調 BWV789 No.3 in D major
第4番 ニ短調 BWV790 No.4 in D minor	第8番 ヘ長調 BWV794 No.8 in F major	第9番 ヘ短調 BWV795 No.9 in F minor

リスト:二つの伝説 S.175
F. Liszt: 2 Légendes, S.175

第1番 小鳥に説教するアッシジの聖フランチェスコ
No.1 St. François d' Assise, la prédication aux oiseaux

第2番 水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
No.2 St. François de Paule marchant sur les flots

リスト:巡礼の年 第2年「イタリア」より "ダンテを読んで ―ソナタ風幻想曲" S.161-7
F. Liszt: Après une lecture de Dante (Dante Sonata), Fantasia quasi Sonata from "Années de pèlerinage, 2nd year, Italy", S.161-7

スーパーソリスト達による
秋の特別コンサート Vol.5

ブルース・リウ ピアノ・リサイタル Bruce Liu Piano Recital

12月5日(月) 19:00 東京 東京オペラシティ コンサートホール
December 5 Mon. 19:00 Tokyo Tokyo Opera City Concert Hall

後援:カナダ大使館

ショパン:マズルカ風ロンド ヘ長調 Op.5
F. Chopin: Rondo à la Mazur in F major, Op.5

バラード第2番 ヘ長調 Op.38
Ballade No.2 in F major, Op.38

モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」の"お手をどうぞ"の主題による変奏曲 変ロ長調 Op.2
Variations on "La ci darem la mano" from Mozart's Don Giovanni in B-flat major, Op.2

ラヴェル:鏡
M. Ravel: Miroirs

第1曲:蛾	I. Noctuelles
第2曲:悲しい鳥たち	II. Oiseaux tristes
第3曲:海原の小舟	III. Une barque sur l'océan
第4曲:道化師の朝の歌	IV. Alborada del gracioso
第5曲:鐘の谷	V. La vallée des cloches

リスト:ドン・ジョヴァンニの回想 S.418
F. Liszt: Reminiscences of "Don Giovanni", S.418

25th Anniversary Tokyo Opera City Concert Hall Recital Hall

協力:ソニー・ミュージックジャパン インターナショナル、ユニバーサル ミュージック、ぶらあぼホールディングス

Program Notes 11.28 室内楽の夕べ

寺西 基之(音楽評論家) Motoyuki Teranishi

モーツァルト:ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 K.478

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756－91)が残した2曲のピアノ四重奏曲のうち、1785年に書かれたこの第1番は短調を主調としている。短調の楽章は第1楽章だけとはいえ、緊密な書法のうちにモーツァルトの短調作品に特有の激しいパトスと劇的な情熱を打ち出したピアノ四重奏曲となっており、当時どちらかというと社交的性格を持つジャンルとみなされていたこの曲種の概念を外れた悲劇的な色合いを示している。この曲を書いていた頃のモーツァルトはウィーンで華々しい活動を繰り広げ人気も絶頂にあったが、一方で聴衆の好みを超えた高い芸術的な高みをめざすようにもなっていた。この大胆な作品はそうした方向の現れといえるだろう。

第1楽章(アレグロ)は厳しい表情の第1主題を中心に劇的な緊張感が作り出される。**第2楽章**(アンダンテ)は深い叙情を湛えた緩徐楽章。**第3楽章**(アレグロ・モデラート)は明朗な長調のロンドだが、その中に織り込まれるデリケートな陰影の変化がモーツァルトらしい。

メンデルスゾーン:ピアノ三重奏曲第1番 ニ短調 Op.49

フェリックス・メンデルスゾーン(1809－47)のピアノ三重奏曲といえば、少年期の習作を別にすれば2曲が知られている。どちらも確かな構成力と豊かなロマン性との見事な調和のうちにメンデルスゾーンの個性が端的に示された名品で、特に1839年に作曲されたこの第1番は演奏頻度が高い。メンデルスゾーンの友人であり、同じくドイツ・ロマン派を代表する作曲家だったシューマンもこの曲を高く評価し、ベートーヴェンやシューベルトのピアノ三重奏曲に並ぶ優れた作品と称えている。

第1楽章(モルト・アレグロ・アジタート)はメランコリックな第1主題と叙情的な第2主題を持つソナタ形式で、ロマン的な情熱を秘めている。**第2楽章**(アンダンテ・コン・モート・トランクィロ)は情感に満ちた美しい緩徐楽章。中間部はやや劇的な激しさを強める。**第3楽章**(スケルツォ、レッジェーロ・エ・ヴィヴァーチェ)はメンデルスゾーンらしい軽やかなスケルツォで、ロンド・ソナタ形式をとる。**第4楽章**(アレグロ・アッサイ・アパッシオナート)はリズミックな主題を中心にダイナミックな展開を示すロンド・フィナーレである。

ブラームス:ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 Op.25

ヨハネス・ブラームス(1833－97)が残した3曲のピアノ四重奏曲は、いずれも古典的な論理性のうちに深いロマン的情感を表現したいかにも彼らしい作品であるが、興味深いことに、3曲とも最初の構想が初期の1855年前後になされながら完成に歳月を要している。本日演奏される第1番ト短調はその中では最も早く、1861年の秋の初めに完成されている(なお第2番イ長調もそれからほどなく完成されているが、第3番ハ短調はその後何度も書き直されたこともあって最終的な完成は実に1874年まで持ち越された)。着手から完成に至るまでの時期のブラームスは、恩人シューマンの死やその妻クララに対する秘めた思慕、令嬢アガーテ・フォン・シーボルトとの恋愛と別れなど、青春期ならではの様々な事件を経験している。この作品は、そうした青春の多感さを暗くドラマティックな情熱的表現のうちに直截に示したものといえるだろう。

第1楽章(アレグロ)は、暗い感情の起伏がブラームスらしい緊密な書法によったソナタ形式のうちに表現される。**第2楽章**(アレグロ・マ・ノン・トロッポ)は「インテルメッゾ(間奏曲)」と題された幻想的な楽章で、暗い情感が支配する主部に対し、活発な動きのトリオが対照される。**第3楽章**(アンダンテ・コン・モート)は明るいおおらかな主題で始まる表情に富んだ緩徐楽章で、特に中間部では劇的な高揚を作り出している。**第4楽章**(プレスト)は「ジプシー風ロンド」と題されており、きわめて情熱的な主題を中心に、起伏に富んだ発展が繰り広げられるロンド・フィナーレである。

Program Notes 11.30 藤田真央 協奏曲の夕べ

寺西 基之（音楽評論家） Motoyuki Teranishi

ウェーバー：歌劇「オイリアンテ」序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786－1826）は1821年初演の「魔弾の射手」でドイツ・ロマン派の国民的オペラを確立したといわれる。「オイリアンテ」はそれに続いて書かれたオペラで、1823年に初演された。いかにもロマン派好みの中世を舞台にした幻想的な物語によるオペラで、アリアや重唱やレチタティーヴォなどの間の区切りを明確にせずに音楽の流れを連続させ、ライトモティーフ的な手法を取り入れるなど、のちのワーグナーの楽劇を先取りする作品となっている。今日オペラ全曲が演奏される機会は稀だが、オペラ中の旋律を主題に用いた序曲は輝かしい魅力を持った名品ゆえにしばしば演奏される。自由なソナタ形式をとり、展開部の途中ではオペラ中の幽霊の音楽による一節（弱音器付きの8本のヴァイオリンによる）が幻想的な雰囲気を生み出す。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 Op.18

セルゲイ・ラフマニノフ（1873－1943）の作品の中でもとりわけの人気曲であるこの協奏曲は、ロシア的な民族性、ロマンティックな表現、ピアニスティックな名技性が一体化した彼らしい作品だ。作曲のきっかけは1899年にピアニストとしてロンドンで成功を収めた際に当地の団体から協奏曲の作曲を依頼されたことにある。しかし当時彼は交響曲第1番の初演失敗が原因でスランプ状態にあり、筆を進めることができなかった。そして精神科医ダーリ博士の暗示療法によってやっと自信を回復して1901年に曲を完成にこぎつけたという。

もっとも最近は、このエピソードには誇張と作り話が入り混じっているとする研究者も出てきた。それによると、ラフマニノフが多少の精神的な不安定さゆえにダーリ博士の治療を受けたことは事実だが、決して作曲ができないほどの極度のスランプにあったのではなく、交響曲第1番の失敗も尾を引いていたわけではなかったという。

真偽はともかく曲は1901年モスクワでラフマニノフ自身の独奏で初演されて大成功を収め、彼は作曲家としての名声を確固たるものとしたのだった。

第1楽章（モデラート）はピアノ独奏の重い和音による序奏の後、暗い情熱的な第1主題とロマン的な第2主題を持つ主部が劇的な発展を繰り広げる。**第2楽章**（アダージョ・ソステヌート）はラフマニノフらしい甘美な情感を湛えた緩徐楽章だが、中間部は軽快な動きを見せる。**第3楽章**（アレグロ・スケルツァンド）は力感に溢れる主要主題と表情豊かに息長く歌われる副主題が起伏ある展開を織り成していく。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30

この協奏曲の作曲が始められたのは1907年前後のことで、この時期ラフマニノフはロシアの政情不安を逃れてドレスデンで生活をしていた。彼は1909年から翌年にかけてアメリカへの演奏旅行を計画し、その際に披露するための協奏曲としてこの第3番の作曲を進めていく。作品は旅行前の1909年9月に一応完成をみたものの、細部の仕上げはアメリカ到着後になされ、同年11月28日ニューヨークにおいてラフマニノフ自身の独奏で初演された。様式的には前作のピアノ協奏曲第2番のスタイルを受け継いでいるが、独奏には一層難度の高い技巧が要求されており、シンフォニックな管弦楽との緊張溢れるやり取りのうちに、表出力に満ちた音楽が展開されていく。ピアニストにとって、古今の数あるピアノ協奏曲の中でもとりわけ演奏の難しい曲として知られる傑作である。

第1楽章（アレグロ・マ・ノン・タント）はピアノ独奏が両手ユニゾンでシンプルに提示する第1主題（聖歌に基づく）に始まる。起伏溢れる発展が繰り広げられる劇的な楽章だ。**第2楽章**（インテルメッゾ、アダージョ）は暗いメランコリックな気分を基調とする緩徐楽章で、次第に熱を帯びていく。そのまま休みなく続けられる**第3楽章**（フィナーレ、アッラ・ブレーヴェ）は、エネルギッシュな激しさのうちに目ざましい名技性が発揮される興奮に満ちたフィナーレである。

Program Notes 12.3 スペシャル・ガラ・コンサート

柴田 克彦（音楽評論家） Katsuhiko Shibata

R.シュトラウス：歌劇「カプリッチョ」より前奏曲

「カプリッチョ」（1942年初演。全1幕）は、ドイツ後期ロマン派の巨匠リヒャルト・シュトラウス（1864－1949）が残した最後のオペラ。オペラにおける言葉と音楽の優位性をテーマにした内容で、シュトラウスの美意識の極致を示す作品でもある。

前奏曲は、登場人物の音楽家フラマンの作との設定で奏される弦楽六重奏曲。前奏曲には珍しい形態の本作は、単独の室内楽曲あるいは弦楽合奏曲として演奏されるケースも多い。曲は、各楽器が繊細に綾なしながら流れゆく重層的かつ優美な音楽。

チャイコフスキー：フィレンツェの思い出 Op.70

ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840－93）が残した最後の室内楽曲。オリジナルは弦楽六重奏だが、弦楽合奏でもしばしば演奏されている。1886年にペテルブルグの室内楽協会の名誉会員に選ばれたことへのお礼として作曲が開始されたものの、創作は難航。1890年フィレンツェで本格的に再開され、同年ロシアで完成された。なお現在演奏されるのは1892年に改訂された第2稿である。

タイトルは、主にフィレンツェで書かれたことや、30代から訪れて気に入っていたこの町への感謝の思いからの命名といわれている。ただしイタリアの素材は使われておらず、むしろロシア的な作品。入念な対位法を駆使しながら緊密に構成された音楽で、ニ短調を基調としている。

第1楽章：アレグロ・コン・スピーリト。激しい第1主題と感傷的な第2主題が対比されながら力強く進む。

第2楽章：アダージョ・カンタービレ・エ・コン・モート。ニ長調の緩徐楽章。セレナード風の第1主題と宗教歌風の第2主題が中心となる。

第3楽章：アレグレット・モデラート。イ短調のスケルツォ楽章。ロシア民謡風の主部に、明るい舞曲風の中間部が挟まれる。

第4楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ。やはりロシア舞曲風の第1主題と朗々と歌われる第2主題が対比され、後半は壮大なフーガが展開される。

ロッシーニ：歌劇「セビリアの理髪師」より「私は街の何でも屋」

「セビリアの理髪師」（1816年初演。全2幕）は、イタリアの初期ロマン派オペラの大家ジョアッキーノ・ロッシーニ（1792－1868）の代表作。才気煥発な理髪師フィガロの手助けで、アルマヴィーヴァ伯爵と町娘ロジーナが恋を成就させる物語は、「フィガロの結婚」の前編にあたる。

この曲は、第1幕開始後間もなく、颯爽と現れたフィガロが、「私は街の何でも屋。皆が私を求める。フィガロ、フィガロ、はいここにおります。ああ、何て忙しい…」と歌う、陽気な自己紹介アリア。特に後半の早口が聴きものだ。

ベッリーニ：歌劇「ノルマ」より「清らかな女神」

「ノルマ」（1831年初演。全2幕）は、イタリア・ロマン派オペラの推進者ヴィンツェンツォ・ベッリーニ（1801–35）の代表作にして、華麗な美声に重点を置いた「ベルカント・オペラ」の最高傑作。紀元前のガリア地方（フランス近辺）を舞台に、神秘宗教ドルイド教の巫女の長ノルマ、若い巫女アダルジーザ、ローマ総督ポリオーネの三角関係を描いた、ギリシャ悲劇風の内容となっている。

この曲は、第1幕でおもむろに登場したノルマが、月に向かって「清らかな女神よ…」と祈りを捧げる美しき名アリア。次いで「愛しい人よ、帰って来て」と思いを語る速い部分に移るのだが、この時彼女は、最高位の巫女でありながら、敵対するローマ総督を愛して子供まで儲け、しかも今は彼の愛を得ていない、という複雑な感情を持っている。ただしコンサートでは前半の抒情的な部分のみ歌われるケースが多い。

Program Notes

ヴェルディ：歌劇「トロヴァトーレ」より「君のほほえみ」

「トロヴァトーレ」（1853年初演。全4幕）は、イタリア・ロマン派オペラの巨匠ジュゼッペ・ヴェルディ（1813－1901）が中期に作曲した、情熱的で劇的な名作。15世紀スペインを舞台にした物語は、ジプシーの老婆アズチェーナの復讐劇に、宮廷女官レオノーラを巡るトロヴァトーレ（吟遊詩人）のマンリーコとルーナ伯爵の争いが絡んだ陰惨な悲劇である。

この曲は、第2幕第2場、レオノーラを略奪せんと待ち伏せしているルーナ伯爵が、「あの人のかすかなほほえみは、星のきらめきにも勝る…」と彼女への思いを歌う、しっとりとしたアリア。

ヴェルディ：歌劇「トロヴァトーレ」より「聞いたかな、朝ともなれば」

第4幕、マンリーコは塔に幽閉されている。彼を愛するレオノーラは助命を決意し、「朝になったら彼を殺せ」と家来に命じたルーナ伯爵のもとに現れる。この曲はそこで展開される二重唱。レオノーラはマンリーコの命乞いをするも、嫉妬に狂ったルーナ伯爵は取り合わない。しかし彼女が我が身を伯爵に捧げると告げると、彼は助命を約束する。ところが彼女は密かに毒を仰いで身を守る。そしてマンリーコが助かったことを喜び、伯爵はレオノーラが遂に我がものになる喜びに燃える。こうした切迫した場面だが、音楽はメロディアスでヴェルディ・オペラの醍醐味に溢れている。

ヴェルディ：歌劇「運命の力」より「神よ平和を与えたまえ」

「運命の力」（1862年初演。69年イタリア初演の際に改訂。全4幕）は、ペテルブルグの帝室歌劇場（現・マリインスキー劇場）の依頼で書かれた円熟期のオペラ。18世紀スペインを舞台にした物語は、誤って恋人レオノーラの父を殺したドン・アルヴァーロが運命の力に翻弄される、これまた陰惨な悲劇である。

この曲は、最後の第4幕第2場でレオノーラが歌う、当オペラの看板アリア。自らも運命に翻弄されて僧院裏の岩窟に隠棲している彼女は、アルヴァーロへの愛を歌い、「貴方に2度と会えないなら、死なせてください。死のみが私を平安にしてくれるでしょう」と神に祈る。序曲でお馴染みのフレーズも登場する、切々たる名歌。

ショパン：アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22

ポーランドに生まれ、パリで活躍した“ピアノの詩人”フレデリック・ショパン（1810－49）が残した最後の管弦楽付き作品。「大ポロネーズ」は、1830年に祖国で作曲が開始され、1831年に滞在中のウィーンで完成されたとみられており、前半部分は1834年にパリで書き加えられた。

「アンダンテ・スピアナート（「なめらかな。落ち着いた」といった意味）」は、ピアノのみで奏される優美な音楽。続く「華麗なる大ポロネーズ」は、アレグロ・モルトの管弦楽部分の後、ピアノがテンポを落としてポロネーズの主題を呈示し、短調の中間部を挟んで、華麗な盛り上がりをみせる。

ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

近代ロシアの大家セルゲイ・ラフマニノフ（1873－1943）は、ピアノ協奏曲第2番、第3番等の名作を残した後の1917年、ロシア革命を機に亡命し、主にアメリカに住んで、作曲家よりもピアニストとして活躍した。同曲はその時期の稀少な一作。1934年スイスのルツェルン湖畔の別荘で作曲された。

本作は「狂詩曲」と題されているが、実質的な形態は「ピアノ協奏曲」、内容は「変奏曲」である。主題は、イタリアの大ヴァイオリニスト＆作曲家パガニーニ（1782－1840）の「無伴奏ヴァイオリンのためのカプリース」全24曲の最終曲で、ブラームスやリストほか多数の作曲家が取り上げている有名な旋律。全体は、この主題に基づく24の変奏に序奏とコーダを付した形だが、リスト風の技巧と色彩的な管弦楽法が駆使され、グレゴリオ聖歌「怒りの日」も絡むという、凝った作品に仕立てられている。

曲は大まかにみて、急-緩-急の構成。まずは序奏に続いて第1変奏が現れ、その後に主題（イ短調）の全体像が示される。この手法はかなり意表を付いている。第6変奏まで一気に進み、第7＆第10変奏で「怒りの日」が登場。作曲者によると、次の第11～18変奏は「愛のエピソード」だという。中でも甘美な第18変奏は本作を代表する部分。一見新しいこの旋律も主題の変形だ。第19変奏から再び速いテンポで進行。「怒りの日」をまじえながら高揚し、さりげなく終わる。

Program Notes 12.3 イム・ユンチャン ピアノ・リサイタル

原 明美（音楽評論家） Akemi Hara

ギボンズ：ソールズベリー卿のパヴァーヌとガイヤルド

イギリスの作曲家オーランド・ギボンズ（1583－1625）は、ウェストミンスター寺院のオルガニストを務めるなど、鍵盤楽器奏者としても活躍した。当時イギリスでは、ハープシコード（チェンバロ）をヴァージナルと呼んでいたが、ギボンズは、ウィリアム・バードやジョン・ブルと共に、エリザベス朝時代の鍵盤音楽、いわゆるヴァージナル楽派を代表する一人である。ゆったりとしたパヴァーヌと、速いガイヤルドを組み合わせた「ソールズベリー卿のパヴァーヌとガイヤルド」は、1612年に没したソールズベリー卿ロバート・セシルのために作曲された。いずれも短い舞曲であるが、特に「パヴァーヌ」は、音楽学者のウィリ・アーペルによれば「ベートーヴェンの後期ソナタを思わせる傑作」であり、豊かな楽想に彩られている。

J.S.バッハ：シンフォニア BWV787～801（全15曲）

バロック音楽の頂点に立つドイツの大作曲家、ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685－1750）の作品のなかで、2声部のための「インヴェンション」（全15曲）と、3声部のための「シンフォニア」（全15曲）は元来、長男のために書いた曲集に収められていた。その序文にバッハ自身が記したところによれば、「2声をきれいに演奏すること」「3声のそれぞれ独立した声部も弾きこなすこと」「カンタービレの（よく歌う）奏法を習得すること」「作曲の予備知識も得ること」などが意図されている。この曲集は現代においても、ピアノ学習者にとって必須の教材であると同時に、教材を超越した至高の芸術作品である。

「シンフォニア」全15曲は、ハ長調に始まり、同主調のハ短調に移った後、主音が音階順に上行して進むが、今回イム・ユンチャンは、第3曲以降の順序を変更し、以下のように演奏する。全体を通した場合の、調の流れの美しさなどを考慮した曲順と言えるだろう。

第1番：ハ長調→第2番：ハ短調→第5番：変ホ長調→第14番：変ロ長調→第11番：ト短調→第10番：ト長調→第15番：ロ短調→第7番：ホ短調→第6番：ホ長調→第12番：イ長調→第13番：イ短調→第3番：ニ長調→第4番：ニ短調→第8番：ヘ長調→第9番：ヘ短調。

リスト：二つの伝説 S.175

フランツ・リスト（1811－86）は、超絶的な演奏技巧を誇る名ピアニストであったが、晩年は宗教生活に入って大修道院長の称号を得た。1863年に作曲され、次女のコジマに献呈された「伝説」S.175は、13世紀初頭にイタリアでフランチェスコ教団を創始した聖フランチェスコの聖業を描いたピアノ曲であり、次の2曲から成る。

第1曲「小鳥に説教するアッシジの聖フランチェスコ」：聖フランチェスコが鳥たちに語りかけると、鳥たちはその教えをじっと聞いていた、という物語に基づいている。

第2曲「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」：リストがヴァイマル郊外の別荘の書斎で眺めていたというシュタインレの絵画と、『ジュゼッペ・ミシマルラにより記されたパオラの聖フランチェスコの生涯』という物語を題材として、聖フランチェスコが波の上を渡ってゆく姿を描いている。

リスト：「巡礼の年」第2年「イタリア」より「ダンテを読んで―ソナタ風幻想曲」 S.161-7

リストは、若いころパリに出て、サロンに出入りする数多くの芸術家たちと交流を深め、文学や美術の知識を吸収した。「巡礼の年」は、恋人のダグー伯爵夫人と共に各地を旅した印象などをもとに、作曲されたピアノ曲集で、全4巻から成り、このうち「第2年イタリア」S.161は、7曲で構成されている。その第7曲に当たる「ダンテを読んで」は、1839年に完成したが、1849年に改訂された。標題は、リストがパリのサロンで知り合ったヴィクトル・ユーゴーの詩集『内なる声』のなかの詩から取られたが、曲の内容は、13～14世紀イタリアの大詩人A.ダンテの『神曲』のなかの「地獄篇」に、インスピレーションを得たものとされる。そして、副題に「ソナタ風幻想曲」とあるように、「地獄篇」に描かれた暗く不気味な情景を幻想性豊かに表現する一方、単一楽章のソナタとも言える壮大かつ緊密な構成で書かれている。

Program Notes

Program Notes 12.5 ブルース・リウ ピアノ・リサイタル

道下 京子（音楽評論家） Kyoko Michishita

ショパン：マズルカ風ロンド ヘ長調 Op.5

フレデリック・ショパン（1810－49）は、19世紀前期のポーランドを代表する作曲家。1830年にワルシャワを離れてからは、祖国の土を踏むことはなく、後半生をフランスで過ごした。

《マズルカ風ロンド》は、ワルシャワ音楽院時代の1826年か1825年に作曲された。ロンド形式で書かれており、主題にはマズルカのリズムが織り込まれている。リディア旋法を用いた民謡的な調べとともに、マズルカのリズムがいきいきとした表情をもたらしている。

ショパン：バラード第2番 ヘ長調 Op.38

ショパンの4曲のバラードは、いずれもフランス時代に完成をみた。バラードは古くは物語ふうの詩を指していたが、のちに声楽作品にとり入れられるようになった。ショパンのバラードは、特定の文学作品を背景にしたものではない。

1836年、ショパンはライプツィヒを訪れた。その際にシューマンと会い、《バラード第2番》を演奏している。作品は、シューマンに捧げられた。シチリアーノふうの穏やかな楽想と、イ短調のドラマティックな部分とが交互に現れる。1836年に書き上げられたのちに手が加えられ、その3年後に完成した。

ショパン：モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」の“お手をどうぞ”の主題による変奏曲 変ロ長調 Op.2

この変奏曲は、ショパンがワルシャワ音楽院在学中の1827年あるいは28年に書き上げられた。モーツァルトの《歌劇「ドン・ジョヴァンニ」》のなかの「奥様、お手をどうぞ」による主題は、そのモティーフをとり入れた序奏のあとに置かれる。第5変奏ののち、ポロネーズのリズムをとり入れた6つめの変奏「アッラ・ポラッカ」が続く。この変奏曲の創作の経験は、のちの彼のピアノ協奏曲におけるオーケストレーションにも貢献した。

この作品について、シューマンは「諸君、脱帽したまえ、ここに天才がいる」と高く評価している。

ラヴェル：鏡

フランス近代の作曲家モーリス・ラヴェル（1875－1937）はスペイン国境に近いシブール生まれ。生後まもなくパリへ移り住み、パリ音楽院ではフォーレらに師事した。

ラヴェルは、「アパッチュ」という芸術家集団の一員であった。そのグループのメンバーからラヴェルは5人を選び、彼らが鏡を覗き込んだときにそれぞれがイメージするものを、音楽で表現しようとしたと言われている。1904年から翌年に作曲された《鏡》には、5曲が収められている。

第1曲「蛾」／詩人レオン＝ポール・ファルグの詩にインスピレーションを得た作品。夜の闇に舞う蛾を連想させる。

第2曲「悲しい鳥たち」／真夏の暗い森に迷い込んだ鳥たちの声をモティーフとしている。この曲を献呈されたリカルド・ヴィニェスはピアニストで、《鏡》を初演した。

第3曲「海原の小舟」／画家ポール・ソルドのための作品。水面に反射する陽光と細やかに揺れ動く波を、デリケートな分散和音で表わしている。

第4曲「道化師の朝の歌」／音楽評論家ミシェル・ディミトリー・カルヴォコレッシに捧げられた。スペインの舞曲の力強さやエキゾチックなメロディのはざまから、さまざまな表情が浮かび上がってくる。

第5曲「鐘の谷」／鐘の音が響き合う様を陰影深く描き出している。ラヴェルの弟子で作曲家のモーリス・ドラージュに献呈。

リスト：ドン・ジョヴァンニの回想 S.418

フランツ・リスト（1811－86）は、ハンガリー王国ライディング生まれ。1822年にウィーンでツェルニーに師事したのちにパリへ赴くも、外国人であることを理由にパリ音楽院への入学は認められなかった。しかし、早くして彼はピアニストとして国際的に活躍していく。

《ドン・ジョヴァンニの回想》は1840年作曲。当時はオペラのピアノ編曲版が人気を博しており、モーツァルトのオペラのメロディを用いたこのパラフレーズも、ピアニストとしてのリストの重要なレパートリーであった。

作品は、ドン・ジョヴァンニに殺された騎士長の像による「お前の笑いも夜明けまでに終わるだろうよ」に始まる部分、続いて「お手をどうぞ」を主題として展開する部分、そしてドン・ジョヴァンニのアリア「シャンパンの歌」が繰りひろげられる部分からなる。

Profiles

© Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

樫本 大進 Daishin Kashimoto（ヴァイオリン, Violin）

フリッツ・クライスラー、ロン=ティボーの両国際音楽コンクールでの1位など、5つの権威ある国際コンクールで優勝。マゼール、小澤征爾、ヤンソンス、P.ヤルヴィ等の著名指揮者のもと、国内外のオーケストラと共演。室内楽でも、クレーメル、堤剛等と共演を重ね、現在、兵庫県で「ル・ポン国際音楽祭～赤穂・姫路」を音楽監督として率いている。主なCDに、ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全集（ワーナー・クラシックス）など。2010年にはベルリン・フィル第1コンサートマスターに正式就任。ソリスト活動と並行し、ヨーロッパ楽壇の最前線で活躍している。これまで、恵藤久美子、田中直子、ザハール・ブロン、ライナー・クスマウルに師事。使用楽器は、株式会社クリスコ（志村晶代表取締役）から貸与された1744年製デル・ジェス「ド・ベリオ」。

赤坂 智子 Tomoko Akasaka（ヴィオラ, Viola）

桐朋学園大学ディプロマコース修了。ジュネーヴ音楽院にて今井信子に師事。ルツェルン、ヴェルビエ等、多数の音楽祭に招かれる。またコンセルトヘボウ、ベルリン・フィルハーモニー、ウィーン・ムジークフェライン等、各地の主要ホールにて室内楽やリサイタルに出演。これまでに、庄司紗矢香、樫本大進、ギドン・クレーメル、ミクロシュ・ペレーニ等と共演しているほか、ソリストとしてバイエルン放送響、ミュンヘン室内管、ジュネーヴ室内管等と共演。演奏活動のほか、ジュネーヴ音楽院、デュッセルドルフ音楽院、ミュンスター音楽大学等で後進の指導に当たる。第53回ミュンヘンARD国際音楽コンクール・ヴィオラ部門第3位。

© Marco Borggreve

ユリアン・シュテッケル Julian Steckel（チェロ, Cello）

現代を代表するチェリストの一人。2010年ミュンヘンARD国際音楽コンクール第1位。これまでに、エッシェンバッハ、ノリントン、ゲルギエフ、山田和樹等の指揮者のもと、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ミュンヘン・フィル、パリ管、サンクトペテルブルグ・フィル等と共演し、ルツェルン等の主要音楽祭に出演。室内楽では、ジャニーヌ・ヤンセン、クリスティアン・テツラフ、ヴェロニカ・エーベルレ、アントワン・タメスティ、ラルス・フォークト、モディリアーニ弦楽四重奏団、エベーヌ弦楽四重奏団等と共演している。アヴィ・ミュージックよりリリースした『20世紀チェロ協奏曲集』は、2012年エコー・クラシック賞を受賞。現在、ミュンヘン音楽大学の教授を務める。

© Dovile Sermokas

藤田 真央 Mao Fujita（ピアノ, Piano）

2019年6月、チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞。2017年第27回クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクールで優勝。2021年ヴェルビエ音楽祭での《モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏会（5回）》はmedici.tvを通じで世界中に放映され、大きな注目を集めた。2021／22年シーズンは、ミュンヘンでゲルギエフ指揮／ミュンヘン・フィル、エルサレムでエッシェンバッハ指揮／イスラエル・フィル、ロンドンでワシリー・ペトレンコ指揮／ロイヤル・フィル等と共演。2022年3月シャイー指揮／スカラ・フィルとの共演でミラノ・スカラ座にデビュー。同夏はシャイー指揮／ルツェルン祝祭管との共演にてルツェルン音楽祭にデビューし、ラ・ロック＝ダンテロン国際ピアノ・フェスティヴァル、ヴェルビエ音楽祭に出演。国内でも大野和士指揮／都響と共演するほか、3年5回に亘って行う《モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏会》を日本各地で継続。2021年11月、ソニークラシカルと専属レコーディングのワールドワイド契約締結を発表し、2022年10月にモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲集をリリース。2023年1月にはカーネギーホールでリサイタルデビューを予定。

© Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

ロリー・マクドナルド Rory Macdonald（指揮, Conductor）

英国で最も才能のある、ダイナミックな若手指揮者として、急速に頭角を現している、スコットランド生まれの俊才。コンサートとオペラの両方に精通しており、オペラの分野では、英国ロイヤル・オペラ、シカゴ・リリック・オペラ、サンフランシスコ・オペラ、デンマーク国立歌劇場等で新制作プロダクションを指揮。コンサートの分野では、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、オスロ・フィル、ベルゲン・フィル、ロンドン・フィル、ハレ管、BBCフィル、BBCスコティッシュ響等に客演。近年の主な活躍には、グラインドボーン・ツアーでの「ラ・ボエーム」、フランクフルト歌劇場での「フィガロの結婚」、セントルイス歌劇場での「魔笛」、トゥール歌劇場でのトーマス・アデスの「Powder Her Face」、フィルハーモニア管、ロイヤル・リヴァプール・フィルへのデビュー等がある。

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 Tokyo City Philharmonic Orchestra

© K.Miura

1975年設立。常任指揮者に高関健、首席客演指揮者に藤岡幸夫、桂冠名誉指揮者に飯守泰次郎を擁する。年間100回を超える公演は、定期演奏会および特別演奏会を柱に、オペラ、バレエ公演、テレビ朝日「題名のない音楽会」等へのテレビ出演など多岐にわたる。1994年から東京都江東区と芸術提携を結び、音楽文化の振興を目的とした活動を幅広く行っている。これからの活躍がもっとも期待されているオーケストラである。

© Akira Muto

日下 紗矢子 Sayako Kusaka（ヴァイオリン, Violin）

東京藝術大学を首席で卒業。米・南メソディスト大学および同大学院アーティストコース卒業。フライブルク音楽大学留学。パガニーニ国際コンクール第2位、日本音楽コンクール第1位、ロドルフォ・リピツァー国際コンクール第1位、青山音楽賞、出光音楽賞ほか受賞多数。2008年ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団第1コンサートマスターに就任。2013年読売日本交響楽団コンサートマスターに就任（2017年度より特別客演）。2021年春より「芦屋国際音楽祭」を主宰し芸術監督を務めている。日独両オーケストラのコンサートマスターを兼務しながら、オーケストラ、室内楽、ソロと活発な活動を展開している。ベルリン在住。

© T.Tairadate

鈴木 学 Manabu Suzuki（ヴィオラ, Viola）

桐朋学園大学にてヴァイオリンを原田幸一郎氏に、同大学研究科にてヴィオラを江藤俊哉氏に師事。その後、ハンブルク国立音楽大学に留学、深井碩章氏に師事。1993年、リンツ・ブルックナー管弦楽団の首席ヴィオラ奏者に就任。2004年4月に帰国。現在東京都交響楽団ソロ首席奏者。ルツェルン音楽祭、サンタフェ室内楽音楽祭ほか数々の音楽祭に招かれるなど、国際的な活躍を続ける一方、ブロッホのヴィオラ組曲（コンチェルト版）、エロードのヴィオラ協奏曲の日本初演等、ヴィオラ作品を積極的に紹介している。桐朋学園オーケストラアカデミー、桐朋学園大学院大学等にて後進の指導にもあたっている。

© Yusuke Matsuyama

遠藤 真理 Mari Endo（チェロ, Cello）

第72回日本音楽コンクール第1位、2006年「プラハの春」国際コンクール第3位（1位なし）、2008年エンリコ・マイナルディ国際コンクール第2位。ジャン・ピエール・ヴァレーズ、小林研一郎、山田和樹など国際的に活躍する指揮者や、ウィーン室内管、プラハ響、ザルツブルク・ゾリステン等と共演するなど、国内外で高い評価を得ている。ソリストとして活動すると共に読売日本交響楽団のソロ・チェロ奏者も務める。CDはエイベックス・クラシックスから7枚リリースされており、テレビや映画演奏のほかに、NHK-FMラジオ「きらクラ！」（全国放送）のパーソナリティを8年間務めるなど幅広く活躍中。2009年齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。

© タクミジュン

森谷 真理 Mari Moriya（ソプラノ, Soprano）

ニューヨークのマネス音楽院修了。メトロポリタン・オペラにて2006年に「魔笛」の夜の女王で大成功を収めたのをはじめ、リンツ州立劇場の専属歌手を務め、近年ではドイツのザクセン州立歌劇場で「蝶々夫人」に主演。国内外の著名指揮者および主要オーケストラとの共演も多い。2019年には「天皇陛下御即位を祝う国民祭典」にて国歌独唱を務めた。名古屋音楽大学准教授、東京藝術大学講師、洗足学園音楽大学講師。オフィシャルサイト https://marimoriya.com/

© Dario Acosta

大西 宇宙 Takaoki Onishi（バリトン, Baritone）

ジュリアード音楽院卒。シカゴ・リリック・オペラで研鑽。同歌劇場の世界初演オペラ「ベルカント」にてデビュー。「エフゲニー・オネーギン」表題役で日本デビュー後、国内外にて多数のオペラに出演。レパートリーはバロック、宗教曲、現代曲と幅広く、常に高い評価を得ている。CD「シューマン：詩人の恋」（ピアノ：小林道夫）をBRAVO RECORDSより初リリース。五島記念文化賞オペラ新人賞、日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞。オフィシャルサイト https://www.takaokionishi.com/

© Yanzhang

ブルース・リウ Bruce Liu（ピアノ, Piano）

2021年の第18回ショパン国際ピアノ・コンクールで優勝して、世界の注目を集めた俊英。コンクールでの成功後直ちに世界ツアーを開始し、パリのシャンゼリゼ劇場、ウィーンのコンツェルトハウス、ブリュッセルのボザール、東京オペラシティ、サラ・サンパウロ、ロンドンのロイヤル・フェスティヴァル・ホール（フィルハーモニア管との共演）に出演。またワルシャワ国立フィルとアメリカツアーを行い、ルクセンブルク・フィル、ポーランド国立放送響、N響、ソウル・フィルとも共演。ドイツ・グラモフォン専属アーティスト。ショパン・コンクールのライヴ録音を収録したファースト・アルバムはフレデリック賞を受賞し、グラモフォン誌のクリティックス・チョイスとエディターズ・チョイスのほか、2021年のベスト・クラシックアルバムに選出されるなど、国際的に高い評価を受けている。

© Lisa-Marie Mazzucco

イム・ユンチャン Yunchan Lim（ピアノ, Piano）

2022年第16回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールにおいて、史上最年少（18歳）でゴールド・メダルを獲得し、併せて聴衆賞、最優秀新曲演奏賞を受賞。韓国の始興市生まれ。現在、韓国芸術総合学校に在籍。7歳でピアノを始め、翌年ソウル・アーツ・センターの音楽アカデミーに入学。13歳で韓国芸術英才教育院のオーディションに合格し、指導者のソン・ミンスに出会う。翌2018年、若いピアニストのためのクリーヴランド国際ピアノ・コンクールで2位及びショパン特別賞を受賞。同年のクーパー国際コンクールでは最少年の参加者として注目を集め、3位と聴衆賞を獲得。クリーヴランド管との共演の機会を提供される。2019年には最年少の15歳で韓国のユン・イサン国際コンクールで優勝。2022／23年シーズンのクライバーン優勝者ツアーでは、アスペン音楽祭やウィグモア・ホールを含む4大陸への訪問を予定している。